

氏 名 岸上 伸啓

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 150 号

学位授与の日付 平成 18 年 3 月 24 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 カナダ・イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究
—先住民社会の変容と再生産—

論文審査委員 主 査 教授 佐々木 史郎
教授 松山 利夫
教授 竹沢 尚一郎
教授 本多 俊和（放送大学）

博士論文の要旨

本論文はカナダ極北地域に住む先住民イヌイットの食物分配に関する文化人類学的研究である。本研究の目的は、1980年代から2001年頃までを対象としてケベック州極北部ヌナヴィク地域のアクリヴィク村においてイヌイットがいかなる理由で、どのように食物を分配し、それがどのような社会的な効果や機能を生み出しているかに関して、社会変化や社会関係と関連づけながら記述し、分析することである。その上で、変化しつつあるイヌイット社会において食物分配の実践が果たしてきた役割について考察する。

本論文は6章からなる。第1章では、本論文の目的を述べた後、論文全体の概要について述べる。第2章では、食物分配とは何かを定義した後、イヌイットをはじめとする狩猟採集民社会における食物分配に関する研究を、社会・人類学的研究と生態学的研究（生態人類学と進化生態学）に大別して整理をする。その上で、本論文で取り扱う問題を設定し、この研究の学術的な意義や仮説について述べる。本研究の仮説はイヌイット社会の経済的变化が急激に進む中で、食物分配の実践を通してイヌイットの社会関係が再生産されてきたというものである。そして本章の最後では、現地調査について概略する。

第3章は、本論文の調査対象地であるカナダ・ヌナヴィク地域ケープ・スミス島周辺の自然環境と歴史について記述する。ここでは、現在のイヌイット社会が世界システムや国家の中に包摂され、その一部として存在していることを強調する。

第4章では、1980年代から2000年にかけてのアクリヴィク村の経済構造を貨幣経済と生業経済の点から概略した後に、アクリヴィク村の家族・親族、世帯、キャンプ集団、村落構造、婚姻制度、養子縁組制度、同名者関係、助産人関係、友人関係について記述する。

第5章では、アクリヴィク村において観察された食物分配の全体像を提示した後、ハンター間の獲物の分配、ハンターから村人への獲物や食物の分配、村人間での食物分配、村における食事を通しての食物分配、キャンプ地における食物分配、村全体での共食会、村外との食物分配、そのほかの食物分配や交換、そしてケベック州ヌナヴィク地域で1980年代半ばに創設されたハンター・サポート・プログラムとそれを利用した村全体での食物分配の諸事例を紹介する。そのうえで、これらの食物分配の特徴、その時間的な変化と連続性について述べる。

第6章では、現在のイヌイット社会の食物分配の特徴や内容を、本論文で提起した食物分配の新たな類型に基づきながら検討する。また、アクリヴィク村の事例を用いて、狩猟採集民社会の食物分配の研究から引き出されてきたいくつかの仮説を検討することにより、現代のイヌイットの食物分配の特徴を指摘する。さらに、イヌイットが食物分配の実践を通していかに拡大家族関係や同名者関係などの社会関係を再生産してきたことを検討する。そのうえで、本研究から引き出された結論を要約する。

本論文の結論は、以下の通りである。

(1)アクリヴィク村の食物分配には、基本形として「分与」、「交換」、「再分配」が存在している。さらにハンター・サポート・プログラムによる分配や村全体での共食は、ポランニーの「再分配」の形態である。アクリヴィク村の事例に基づくと、イヌイットの食物分配の中心は、「交換」ではなく、「分与」や「再分配」である。

(2)アクリヴィク村の事例では、「狩猟採集民の分配は分与である」とするバード=デイヴ

イットの説(Bird-David 1990)や「狩猟採集民の食物分配は再分配である」とするウッドバーンの説(Woodburn 1998)をある程度支持している。食物分配を食物の「交換」として理解し、食物分配の形態と社会的な距離との関係をモデル化したサーリンズのモデル(Sahlins 1965)に関しては、全体的な傾向としてアクリヴィク村の事例はモデルを支持するものの、大型動物の肉の分配(分与)や老人・寡婦・病人への食物分配(分与)は親族関係の有無に関係なく実践されているため、モデルの反例となる事例が存在している。

(3)アクリヴィク村の事例に基づく、イヌイットの現在の食物分配の機能には、①カントリー・フードを入手する手段としての機能、②世帯間での食物の平準化機能、③食物分配には既存の社会関係を確認し、維持する機能や、食物分配を意図的にしないことによって既存の社会関係を壊す機能、④ハンターが分与の実践によってコミュニティ内から社会的な名声や敬意を獲得する手段としての機能、⑤文化的な価値観を実現させるという精神的な満足機能、⑥コミュニティ意識やエスニック・アイデンティティの生成・維持機能などがある。このように現在のアクリヴィク村の食物分配は複数の機能を持ち合わせた実践である。特に、食物分配は、食料を必要とする人にとって有利に働く実践である。

(4)アクリヴィク村のイヌイットの食物分配の大半は、親族関係や同名者関係など社会関係に沿った実践であるが、共労、場の共有(コミュニティの成員であること)、弱者(もたざる者)であること、政治協定による公認条件など社会関係以外の要因に基づく食物分配が存在する。そして食物分配の実践は、拡大家族関係など社会関係やコミュニティ意識を確認させ、再生産させる。

(5)地域的にも、時間的にも極北地域のユピート・イヌイット社会における食物分配の形態や機能には差異が見られる。ヌナヴィク地域のアクリヴィク村の事例は、政治協定によって制度化された食物分配を実践している点ではユニークであるが、大半の食物分配が拡大家族関係に沿って実践されている点や「分与」や「再分配」の形態が主流である点では、ほかの地域の事例と共通点が認められる。

(6)食物分配は社会関係や世界観と深く相互に結びついているため、食物分配の衰退は拡大家族関係や世界観の変化などを生み出す原因のひとつになると考える。アクリヴィク村の事例のように新たな食物分配が制度化されたとしても、村人の狩猟・漁労活動が低下すれば、それに連動しながら食物分配の頻度が低下し、分配の範囲が狭まる可能性がある。

(7)現在のヌナヴィク地域のイヌイットは、国家や貨幣経済(世界経済システム)の中に取り込まれているが、カナダ政府やケベック州政府との政治交渉と協定を通して新たな社会を構築してきた。本論文ではその一例として、ヌナヴィク地域のイヌイットは、政治交渉を通して国家や州政府とうまく折り合いをつけ、国家や州政府が提供する制度や資金を利用しつつ、食物分配を実践し続けることによって、彼らの生活を組織する上で核となる社会関係を再生産させてきたことを例証した。カナダの先住民イヌイットの社会は、「国家に抗する社会」や「国家に抗せなかった社会」ではなく、「国家を受け入れ、利用した社会」である。

論文の審査結果の要旨

本論文は、カナダケベック州極北地方に居住するイヌイットと呼ばれる先住民族の社会変化を、食物分配に着目して分析したものである。著者の岸上伸啓は1980年代から同地方のイヌイット社会の調査を続けており、彼の主要な調査地であるアクリヴィク村はいわば定点観測地点である。本論文は彼の長年のフィールドワークによって蓄積されたデータを用いたイヌイット社会研究の集大成的な労作である。

本論文は次のような構成で書かれている。

まず第1章「序論」では本論文の目的と構成の概略が描かれている。続いて第2章ではこの論文の最も主要な概念である「食物分配」（著者は狩猟採集社会に限定している）についての理論的な整理が行われる。その結果彼は食物分配を「分与」「交換」「再・分配」の3つの概念に分解し、さらにそれぞれに「ルールによる」「自主的な」「要求による」という下位区分をもうけて、9つの類型をマトリクスにまとめ上げた。そして、イヌイット社会における様々な形態の食物分配がこのマトリクスのどこに当たり、それがどのように変化したのかを明らかにすることにした。

第3章と第4章は彼が調査したカナダケベック州のイヌイット社会に関する基本的な民族誌的な記述である。第3章ではアクリヴィク村を取り巻く自然環境と生態系に関する基本的な情報と村の成立史が紹介され、第4章では村のイヌイットたちの基本的な生業とその経済システム、そして基本的な社会関係が描かれる。

第5章が本論文の中心となる部分で、ここにアクリヴィク村のイヌイットたちの食物分配の様子と年代ごとの変化、が詳細なデータとともに描かれる。イヌイット社会は1930年代に毛皮交易を通じて世界経済に巻き込まれるが、1980年代にヨーロッパがアザラシの毛皮の輸入を禁止することで、イヌイットたちが経済基盤としていたアザラシが壊滅する。それによって引き起こされた現金収入の減少を補い、彼らの狩猟活動を保護するために、カナダ政府はハンター・サポート・プログラムと呼ばれる政策を採用した。それがイヌイット社会、とりわけ食物分配の実践にどのように影響したのかもこの章で明らかにされている。

第6章は第5章で整理されたデータを整理しつつ、第2章で提起された食物分配の概念的を使って、理論的なモデルを構築する作業を行う。その結果、彼はイヌイットの食物分配の様々な様相を7つのタイプに分類するが、結論的には彼が調査したイヌイットの食物分配は基本的に「分与」と「再分配」であって、「交換」ではなかったことが明らかにされた。その結論は、著者の言葉を借りれば、「狩猟採集民社会の食物分配を「交換」や「互酬性」として理解する傾向の強い従来の人類学的な見解に転換を求めるもので」あった。

本論文はM.モースやC.レヴィ＝ストロースなどが論じた狩猟採集民社会の交換や互酬性の議論を「食物分配」という実践をつかって検証し、そこに一石を投じた点で独創的であった。具体的には、イヌイットの食物分配は「交換」や「互酬性」といった概念では捉えきれず、「分与」や「再分配」という概念を導入しなければ説明できないことを実証的に明らかにした。また、食物分配の実践が、カナダ国家のサポート（ハンター・サポート・プログラム）に依存し、若干の変化を見せつつも、再生産され続けている点や、「第1世界に取り込まれた第4世界の人々」が伝統を再生産する上での国家の役割の大きさを示した

点も重要である。

しかし、審査委員の間からは若干の厳しい意見も見られた。例えば、論旨があまりにも調和的すぎて、調査村内における世代間や収入格差などによる葛藤や対立などが描かれていないために、現実味にやや欠ける民族誌記述となっている点、食物分配の「実践」に着目した分析で、従来の還元主義的な考え方に反対していながら、実践に対する分析が十分でなかった点などである。ただし、これらの批判は、著者の研究のさらなる発展の可能性を示すものであり、決して本論文の論旨やその独創性を否定するものではない。

したがって、審査委員会は本論文が学位に値するものであると判断するものである。